# 小川未明の再転向 ――敗戦以後――

文学研究科日本文学文化専攻博士前期課程2年　増井　真琴

**はじめに**

本稿は、先に著した「転向者・小川未明（上）――階級闘争から八紘一宇へ」（「日本文学文化」平成二八年二月）、および「同（下）」（「日本文学文化」平成二九年二月刊行予定）の続編という位置づけである。一連の論考において、私は、大正期、社会主義者だった小川未明が、戦中、国家主義者へ転向していく過程を、彼の個人史・作品の両面を追うことで辿っていった。山中恒が「日本児童文学最高の作家とされてきた未明の戦時下の言動は「見てはならないもの」とされたのである」（『戦時児童文学論』大月書店、平成二二年一一月）と指摘するように、従来、未明神話の陰に隠れ、断片的にしか論じられてこなかった未明の「転向者」としての側面を通史的に明らかにすることは、先行研究にない、意義のある作業だと考えたからである。(注1)

かいつまんで要約するならば、大正―戦中期の未明の転向は、大きく三つの観点から特徴づけられるだろう。一つは、資本家階級と労働者階級間の階級対立の認識が、天皇制イデオロギーたる家族国家観によって、融解してしまった点。二つは、民衆の受難に寄り添う反戦意識が、施政者目線のアジア・太平洋戦争賛美によって一掃された点。三つは、資本主義批判の動機が、格差批判のヒューマニズムから資本主義がもたらす人間性の堕落へとシフトした点である。いずれも、ダイナミックな路線転換と言える。

しかしながら、未明の転向はこれで終わりではない。戦中、「苟くも生を皇土に享けるものは一木一草と雖も皇土のために役立つべき」（「当面の児童文化」「報知新聞」昭和一五年一二月一日～五日）と天皇制国家への忠誠を説いていた未明は、戦後、「戦争がわるいのだ！」（「戦争は僕を大人にした」「童話」昭和二二年二・三月）と叫ぶ、反戦と民主主義の提唱者となっていく。あられもない状況追随、あられもない「再転向」だ。本論が目指すのは、先の小論で触れることができなかった、戦中―戦後の再転向の軌跡を、丁寧に跡付けることに他ならない。

## 一、戦後民主主義の影響

大正期、「正当なる権利によつて、ブルジョアを脅威せよ！」（「労働祭に感ず」「時事新報」大正一一年五月一日夕刊）と階級闘争を推進し、戦中、「八紘一宇の精神こそ、全人類を救ふに足るものでありませう」（「我を思はば国家を思へ」『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）と聖戦を礼賛していた小川未明だが、戦争に負けると、今度は反戦と民主主義の旗振り役となる。電光石火の如き変わり身の早さだ。本節では、戦後期の未明の足跡を追いたい。

敗戦翌年の昭和二一年三月、未明は児童文学者協会の結成に参加した。この会は、関英雄・佐藤義美・奈街三郎ら中堅どころの児童文学作家が主導の下、設立した団体で、未明は中野重治・坪田譲治・浜田広介などの大家とともに、創立発起人となっている。会の創立趣意書は次の通りだ。

日本がいま新しい夜明を迎へようとしてゐる時、児童文学者の使命もまことに重大であります。軍国主義の教育にゆがめられた児童の精神を解放し、児童に真の人間性が何であるかを知らせ、児童の自由な創造的な生活を培ふために清新な文芸の沃野を拓く事こそわれわれのねがひであります。

「児童文学者協会創立趣意」
（「日本児童文学」昭和二一年九月）

ここで会は、戦前の軍国主義教育を、児童の精神を「ゆがめ」た元凶として否定している。代わりに対置するのが民主主義で、綱領には「民主主義的な児童文学を創造し普及する」、規約には「この会は民主主義文化の建設のために自由で芸術的な児童文学を創造し普及することを目的とする」と、民主主義を重要視する路線を敷いた（「日本児童文学」同前）。ＧＨＱによる「上からの革命」が遂行されていた当時の時代風潮が感じられる。[注2]

もっとも、未明は前年まで日本少国民文化協会へ所属し、民主主義を「敵性文化」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）呼ばわりしていた人物だ。国民を「陛下の赤子」（「日本的童話の提唱」「報知新聞」昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）と呼んでもいた。社会主義から国家主義へと同様、ここには明確な思想的変節がある。だがこの変節について、未明の口から反省や後悔の言葉が語られることは、片言隻句としてなかった。

機関誌「日本児童文学」創刊号で行われた、「一、児童文学の再出発に際して作家として最も反省すべき点」「二、再出発に当つての抱負」を問うアンケートへ、未明は次のような回答を寄せている。

敗戦の結果国民はたしかに卑屈となり無気力となつてゐる。戦争に責任なき児童も貧血症にかかつてゐる。それをこれまでのやうな生やさしいいい子主義や、通俗文学の類でどうなるもの

でもない。彼等の勇気と明朗性を取戻すものは、独り高き情熱に燃える芸術の力だけである。此際作家は外的な解放運動の他に、内的に彼等が自己を発見し、解放に導く任務がある。それには先づ作家自らの自己革命を必要とするであらう。

「児童文学者の反省と抱負」
（「日本児童文学」昭和二一年九月）

この文章からは、戦中、国策協力を担った点への自省が欠落している。「自己革命」は語られるが、それ以前にあるべき「自己批判」はない。アンケートへ答えた作家は未明を含めて二七名。編集部は「作家自身の内面的な反省の声をききたかつたのであるが、編集部の出題が言葉不足だつたためか、省みて他をいふやうな回答や、あまりに一般的な原則論を送つてきた回答が多かつたことは遺憾」と遺憾の意を表明した。また、同号の随想「子供たちへの責任」においても、未明は自身の戦争責任に関して、他人事のような発言を繰り返している。(注3)

昭和二四年一〇月、未明は児童文学者協会の初代会長へ就任。期を見るに敏というべきか、敗戦後の未明は、反戦と民主主義を盛り込んだ童話・随筆を次々と発表していく。未明は何等の反省なきまま、戦後という時代の主潮に便乗して行ったのである。上笙一郎は、この無反省を後押ししたのは、当の児童文学者協会の作家たちに他ならないと批判している。

だけれども、私は、皇道主義から民主主義へという思想の変化が、いささかの自己反省もともなわずにおこなわれてしまったことがすべて未明一個の責任であるとは思わない。そこには、大衆児童文学の作家をのぞく日本の児童文学者すべてが、当然負わなければならぬ責任もあったのではないだろうか。具体的にいえば、昭和二一年三月日本児童文学者協会創立のとき、未明は選ばれて初代会長の椅子についたのだが、この会の創立趣旨には、たしか、侵略戦争に協力しなかったことを会員資格とするという一項があったと記憶している。こういう会の会長に選んだことで、未明を安心させ、そのことが未明の自己検討をはばんでしまったという一面がなかったとはいえない。とすれば、未明を児童文学者協会の会長に選んだ児童文学者たちにも、当然のこととして一半の責任があったのである。

上笙一郎「戦後の小川未明の思想」
（「日本児童文学」昭和三六年一〇月）

未明の会長就任時期については上の思い違いだろう。「侵略戦争に協力しなかったことを会員資格とするという一項」が趣意書・綱領・規約に明文化されていたわけでもない。ただし関は、「あの当時の時勢のなかでは、やはり戦争中あまりはっきりと軍国主義の片棒をかついだ人は積極的には誘わないというふうな申し合せを発起

人会でしました」（関英雄他「座談会　戦後児童文学の諸問題」「近代文学」昭和三四年二月）と語っており、「申し合せ」程度はあったようだ。いずれにせよ会には、創立総会で「児童文学界の戦争責任明確化及び戦責出版社七社（講談社、主婦之友社、旺文社、興亜日本社、公論社、山海堂、家の光協会――引用者注）への不執筆動議」（「協会ニュース」「日本児童文学」昭和二一年九月）を決議しながら、「無キズの者は少ない」（関英雄「民主主義文学の三十年」日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』東京書籍、昭和五三年一二月）ことを理由に、うやむやにしてしまった経緯がある。同業者の無批判が未明の無反省にお墨付きを与えたとする上の指摘は頷けよう。

ちなみに、児童文学者の戦争加担に関しては、戦後二反長半が、「ところが児童文学者の中で、小林多喜二を見つけることは困難であった。いや、ついに小林多喜二なしに終戦を迎えたというのが真実であろう」（『児童文学の展望』大阪教育図書、昭和四八年八月）と、全員有罪の烙印を押している。

このような批判なき環境の中で、昭和二〇年代、未明は世俗の権威を上塗りしていった。昭和二一年一二月、これまでの業績に対して野間文芸賞を受賞。昭和二六年五月には、小林秀雄とともに芸術院賞を受賞した。[注4] 昭和二七年一一月には、皇族・高松宮宣仁と、帝国劇場で、自作「赤い蝋燭と人魚」の舞踊を鑑賞している。さらに、昭和二八年一一月には、永井荷風・川端康成とともに芸術院会員へ推された。同月、文化功労者として表彰、終身年金を獲得している。昭和二五年一一月には、『小川未明童話全集』全一二巻が、昭和二九年六月には、小説と感想を収めた『小川未明作品集』全五巻が、それぞれ講談社から発行開始された。敗戦から一〇年、戦後日本における未明の社会的地位は、不動のものになったと言えよう。周囲の要請もあるのか、この頃から半生を振り返る、回顧録的な文章の執筆が目立つようになる。[注5]

昭和二〇年代後半に入ると、いわゆる「童話伝統批判」が本格化する。これは、鳥越信ら早大童話会の宣言「「少年文学」の旗の下に！」（「少年文学」昭和二八年九月）に端を発する論争で、未明は古き伝統童話を象徴する存在として、徹底した批判を浴びた。鳥越・古田足日・いぬいとみこといった戦後デビューの若手が、その中心的論客である。批判の主眼としては、未明童話における散文性の欠如、社会変革の意志の欠落、現実の子ども読者の軽視の三点が大きく挙げられる。論争の詳細やその評価については、本稿のテーマと逸れるのでこれ以上触れないが、少なくともこの時期、児童文学界という狭いコップの中の争いであるにせよ、未明は生涯最大の批判に晒された。当時の状況を、西本鶏介は「それまで日本児童文学の巨星と信じて疑わなかった未明があたかも文化大革命のように否定されてしまったのです。未明否定者にあらざれば児童文学者にあらざるといった風潮が、ぼくたちのまわりにうずまいていました」（「伝統は克服されたか　未明・広介・譲治の再評価」「日本児童文学」昭和四九年一月）と回想している。

だが、老境へ入った未明が、これらの論戦に応じることはなかった。いや、できなかったと言うべきか。未明の次女・岡上鈴江は、昭和二七年末、第二の高円寺の家へ移り住んだ時点で、未明は既に相当程度老化していたと回顧している。

> 足が思うように軽くあがらず、自分の気持ではあげたつもりの足が地面につっかかって身体の安定を失い、前のめりになるのだった。（中略）そのうえ、ただでさえはや口でわかりにくい言語はますます聞きづらくなっていく。父のいっていることがわからず、何度かききかえすうちに、気短かな父はいらいらして怒鳴りちらしてしまう。かかりつけの医者は定期的に診にきたが、血圧などをはかったあと、いつも同じように、「別に異常はない、かるい脳軟化症だけれど、これは老人病でいたしかたがない」といい、「病気を進行させないため、過労や刺激をさけ、ルチンをおのみになってください」といって帰っていった。
>
> 岡上鈴江『父小川未明』（新評論、昭和四五年五月）

脳軟化症とは脳へ酸素が行き渡らず、脳の一部が壊死する疾患で、今でいう脳梗塞のことだ。晩年の未明は、身体の自由が利かず、知的に衰えていた。当然、創作数は減っている。

またリアリズムをベースにしたそれらの作品は、大正期の社会主義時代の作品群ほど称賛を集めなかった。晩年に限らず、戦後の未明童話は、同時代・後世を通して、おおむね評価が低い。例えば川崎大治は、「近年小川さんが、ますます生活的な童話に主力をそそぐようになつてから、かえつて作品は、児童から離れるような傾向にある。そして、初期の空想的社会主義時代のロマンチックな、激しい人類愛の熱情にもえた頃の作品に、かえつて、児童は大きな魅力をかんじている」（川崎大治他「現代児童文学作家二十七人論」「日本児童文学」昭和二六年六月）と論評。西本は戦後作品について、「あの目をみはるイメージの美しさも、奔放な空想力も影をひそめてしまって」おり、代わりに「説教臭く」、「もはや戦後を生きる作家ではな」かったと論じている（「解説」『定本小川未明童話全集１４』講談社、昭和五二年一二月）。

昭和三六年五月、未明は脳出血で倒れ、死去した。七九歳だった。死後、昭和天皇から金一封を送られている。[注6]

## 二、「戦争が悪いのだ！」――反省なき反戦

かくして、敗戦後の小川未明は、児童文学者協会の結成に参加。それまでの聖戦賛美をかなぐり捨て、反戦と民主主義の唱導者となって行く。この過程で、過去の戦争責任が問われることはなかった。それどころか未明は、「日本児童文学の父」として戦後社会に地歩を固め、芸術院会員・文化功労者など、数々の栄誉をものにすることとなる。本節では、戦後の未明の思想傾向を作品に即して分

析してみたい。

八・一五以後の未明を特徴づけるのは、第一に反戦意識である。ただし、大正期の反戦意識が、国家と民衆の利害相反という社会主義的な――その意味ではやや観念的な――対立図式を根拠としていたのに対して（拙稿「転向者・小川未明（上）」参照）、戦後のそれは、アジア・太平洋戦争という現実の敗戦体験に基づいている。

「悲しみを知らない嘶」（「社会」昭和二一年九月）は三人称童話。主人公は、消息不明の出征兵士を息子に持つ「地主」だ。戦争孤児を育てる「和尚」が、地主宅を訪れ、孤児園への支援を求めるのが、おおよその物語の筋である。和尚は、「いや、こんどの戦争では、お気の毒な方が、どれ程ゐるか知れません。何にしても、戦争ばかりは、地獄にまさる、この世の地獄ですぞ」と、戦争＝「この世の地獄」という見方を披歴。戦後の困窮について、「子供には罪がありません。みんな大人の犯した悪の報いです」と因果応報を語る。地主もまた、「和尚さんが、いはれたやうに、子供に罪はない。凡てが大人の責任なんだ」と感じ入る。先の大戦の惨禍に対する生々しい実感と、一億総懺悔的な雰囲気が濃厚だ。

「新しい町」（「幼年クラブ」昭和二二年八月）は三人称童話。主人公は少年「勇吉」だ。勇吉は「おかあさん」と露天で商いをしながら、戦争へ行った父の帰りを待っている。隣の露天商は、「どくへびがすんでいるジャングルで病死した、おい」を持つ下駄屋の「おじいさん」で、勇吉とは仲が良い。ある日、様子のおかしい「せの高い男」が通りを徘徊し、店を覗いては「ここは、げただな。げたばかりか。こんなものたべられない」「ここは、ろうそく、マッチ、かやりせんこう、色紙、みんなたべられないものばかりだ」などと、食べ物へ異常に執着した様子を見せる。聞けば、この男はニューギニアからの帰還者で、戦時中は、蛇やトカゲ、青虫を食べていたらしい。おかあさんは「おきのどくに、気がへんなんですね」と憐れみ、おじいさんは「せんそうが、わるいんだ」と呼応する。勇吉も「目にいっぱいなみだを」浮かべる。この作品では、食へ固執する南方戦線の復員兵の言動を通して、「気がへん」になるほどの後遺症をもたらす、戦争の非惨が強調されている。

「戦争は僕を大人にした」（「童話」昭和二二年二・三月）は三人称童話。主人公は少年「清吉」だ。戦争で未帰還の父、残された母子という家族設定は、「新しい町」と同様である。清吉は、母の言い付けで用足しへ出向く途中、悪童に「お化」と罵られて泣く、「お婆さん」を目撃する。清吉は子どもらを追い払い、お婆さんを慰めると、彼女は「わたしも、家を焼かれて、身寄りはなし、知り合のところで、厄介になつてゐるが、寒さのため、持病のリユウマチがでて、お薬を買ひに行つた……」と、涙ながらに身の上を語った。父のいない清吉以上に、「お化」は孤独な境遇だった。清吉は彼女の「あはれな影を見送つた」後、「戦争がわるいのだ！」と叫ぶ。ここから物語は、かつて空襲の夜、猛火の中、母と逃げ惑い、母が涙した時点（「お前、帰らうつて、どこへ帰へるの。もうお家はな

いんだよ」）へと遡る。本編では、戦後と戦時下、二人の女性の涙を通して、戦争がいかに人間を苦しめるものか、剔抉している。

ことほど左様に、戦後の未明童話にはアジア・太平洋戦争を素材とした、反戦意識の横溢したものが多い。大正期の童話「野薔薇」（「大正日日新聞」大正九年四月一二日夕刊）や「強い大将の話」（「読売新聞」大正九年一一月一五～一八日）が、特定の時代、特定の戦争を名指ししないメルヘンな反戦表象であったのとは、対照的だ。

とは言え、これらの作品には、かつて自身がその戦争へ協力した過去に対する反省が、致命的なまで欠けている。戦後、「戦争がわるいのだ！」と作中人物に語らせている未明は、戦時中、「東亜新秩序」（近衛文麿内閣）や「大東亜共栄圏」（東条英機内閣）の理念に共鳴し、「然るに今度の事変は、私達に民族的の自覚を促した。（中略）即ち、私達の民族的理想として、東亜新秩序の建設があり、国防国家の完遂がある。それ故にすべての作家は、文学行動を通して、翼賛し協力しなければならぬのだ」（「新しき児童文学の道」「都新聞」昭和一六年五月一二・一三日）などと、戦意高揚を煽っていたのではなかったか。この思想的変節について無反省の態度を貫いたことは、未明という人間の大きな特徴だ。

未明は何故、反省しないのだろうか。これは一つに、彼が、物事を客観的に捉える能力を著しく欠いていたからだと考えられる。続橋達雄は、未明が「自伝」（「早稲田文学」明治四五年一月）で、中学時代のカンニングを「カンニングを陋劣なる理化の教師に発見せられたため落第した。私は、終生故郷の学校生活に対して憤怒と屈辱の念を禁じ得ない」と回想している点を捉え、次のような分析を行っている。

> 倫理的にみれば、かれのカンニングこそ陋劣な行為である。それを反省することなしに、カンニングを発見した相手の陋劣さを攻撃してやまない。（中略）幼いといえばまことに幼く、自我の強い自己中心的発想が鮮明である。
>
> 続橋達雄『未明童話の研究』（明治書院、昭和五二年一月）

カンニングの実行者と摘発者、どちらに非があるかと言えば普通前者だが、「自伝」では前者が後者を「陋劣」と非難する倒錯が生じている。一言で言えば、逆ギレだ。続橋はこの一文に着目し、「ここからは、自己とか人間あるいは社会のありようを表から裏から眺めて相対化し、冷静に客観的にそれらを凝視しようとする作家的姿勢は生まれてこない」と、後年の未明の感情的な作風との連続性を指摘している。

二つに、保身もあっただろう。高村光太郎が「暗愚小伝」（「展望」昭和二二年七月）で自己切開したように、自らの戦争責任を認めることは、世間から非難を浴び、作家としての栄達を放棄する事態へ繋がりかねないからだ。その意味で、戦後、童話作家仲間が過去を咎めず、児童文学者協会会長の席まで与えてくれたことは、「未明

を安心させ」（上笙一郎「戦後の小川未明の思想」「日本児童文学」昭和三六年一〇月）る、誠に都合のよい展開だったと言えよう。

なお、戦中から戦後へと同様、大正から戦中にかけての転向も相当激しいが、こちらに関しても未明には反省した形跡がない。未明の無反省は筋金入りだ。

第二の特徴は、民主主義の推進である。

今はたしかに文学革命のときである。戦後旧文化は破壊され、道義、慣習はもとより、秩序は混乱し、善悪の標準すら失われた。しかるに代るべき新道徳は起つていない。特権階級や金持が横暴であつて、弱肉強食が平気で行われている限り人権の平等、分配の公正の事実のあろうはずがなく、真の民主主義はありえない。

「現下の所感」（「児童文学新聞」昭和二五年三月一日）

この文章は、児童文学者協会の機関誌「児童文学新聞」第一号へ寄せた一文だ。副題は「会長を受諾して」、一面のトップ記事として扱われている。「特権階級や金持」の横暴、「弱肉強食」の社会を、「真の民主主義」の観点から批判しようというのが、全体の論旨である。文末では、「資本力の攻勢」に対して、「真の民主主義への新しき芽を擁護しなければならない」と重ねて語られる。戦前、「吾等の文化は、民主々義的な、敵性文化の類似であつてはならぬのである」「自由主義時代に感染したる、心の汚辱を一洗して、真に日本精神に生き、国家に殉ずることである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と民主主義・自由主義を否定し、「日本の家族制度は、日本精神を中軸とする、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか?」（「日本的童話の提唱」「報知新聞」昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）とファナティックな家族国家論を唱えていた人間と、よもや同一人物とは思われない。

「心の芽」（「少国民の友」昭和二一年二月）は三人称童話。主人公は青年「正吉」だ。正吉は幼少期、不慮の事故から右足に障害を負い、「碌々学校へも行かず」、町の縫箔屋へ弟子入りする。手先の器用な正吉は、「主人」の代わりをするほどの腕前となったが、戦争の最中、縫箔屋は商売にならず、まもなく閉店しまった。戦後、成人となり、主人と再会した正吉は、近日行われる総選挙について、次のような説諭を受ける。

「これからは、だまされてはいけないし、強くならなければならん。そして、真に、自分達のためになり、力のない者の味方になる、正しい人間を選挙するのだ。いままでは、そういふあたりまへのことすら出来なかつたが、いよいよそれができる、自由な時代になつたのを、知つてゐるね」

「はい、自由主義の時代でせう」

「さうだ、自分が正しいと信じたとほりにする、それが何より貴いことなのだよ」

続けて、「金とか、学問とかいふことより、何よりみんなが正しい考を持つ人間となることが大切なんですね」と問う正吉に、主人は「それが、民主主義なんだよ」と応答。主人の教えを受けた正吉は、以後誰に投票しようか、「暇があれば、選挙候補者の演説を聞き歩く」ようになる。本編では、戦中期、痛罵の対象だった民主主義や自由主義が、青年の指針とすべき理念・価値観として称揚されている。[注7]「猫も杓子も自由主義といひ、民主主義といふ」（本田秋五「芸術歴史人間」「近代文学」昭和二一年一月）時代の、典型例だ。[注8]

第三の特徴は、私欲への嫌悪である。

今日の商品雑誌の、少からず児童に迎合するごとき傾向は必ずしも、児童の真の趣味娯楽をもって選択したものでなく、むしろ大人の要求や、興味が反響したといえるものがあります。今の子供が猟奇的や英雄主義や、冒険や、闘争的のことや、その他これに類するものを愛好するのは、資本主義的ジャーナリズムに感染した大人の心が反映した結果であります。

「童話作家を志す人へ」

（日本児童文芸家協会編『児童文学の書き方』角川新書、昭和三一年九月）

また、金銭にこだわってはいけないということも（幼少期、両親に――引用者注）厳しく説ききかされていました。よその家へ使に行って、その御苦労賃にとお菓子などをいただいて帰ることはありましたが、金銭をもらうことは固く禁じられていました。ものの考えかたが物質的に偏ることを厳に戒められていたのです。（中略）そういう遠い日のことをおもうと、現代の社会にはあまりにも精神教育が欠けているとおもわざるをえません。世の中は進んだのかも知れませんが、金がありさえすれば何でも出来るという世の中を私は肯定する気にはなれないのです。

「自分を失ってはいけない」（「社会教育」昭和二六年七月）

「資本主義的ジャーナリズムに感染した大人の心」「金がありさえすれば何でも出来るという世の中」を肯んじ得ない未明。未明には、物欲・金銭欲・名誉欲など、資本主義が昂進する人間の私欲全般への嫌悪がある。濃淡はあれ、この私欲への嫌悪は、大正・戦中・戦後と一貫していよう。[注9]だが、大正・戦中期の未明が、私欲の大本たる資本主義を「階級闘争」や「日本精神」のスローガンで直接弾劾していたのに対し、戦後期の未明は、資本主義そのものへの批判をさほど行わない。代わりに、個人の私欲への惑溺を、精神論的に戒めようとする傾向がある。

「金で買えない仕合せ」（「こども朝日」昭和二三年七月）は三人

称童話。主人公は、「田舎の貧しい家」に生まれ育った「ヤスケじいさん」だ。ヤスケは少年期に東京へ奉公へ出されて以来、「人間は、いつでも正直に、よく働かなければならぬ」という亡き母の教えを墨守し、清貧に生きている。ある日、ヤスケのもとに、戦後成金の「サキチ親方」が現れ、母の思い出の品であるバラの高額売買を持ちかけてきたが（「おじいさん、いくらでも金を出しますが、このばらを、私にゆずつてくれませんか？」）、ヤスケは拒否。ヤスケの拒絶を通して、金に釣られない心の清白が讃えられている。

「託児所のある村」（「文学教育」昭和二六年一〇月）は三人称童話。地方の託児所を舞台とした群像劇だ。「子供達」や「若い保母さん」は愉快に過ごしているが、ある日東京から、「黒い服を着た、役人」の一行が見学へ来ると、「冷たい空気が、あたりを流れ」る。近くで写生中の「青年画家」は、訝る一行に、「お役人や、金持や、学者は、自分等の仲間でない、いつも上の方にいて、命令するものだと思つているから、きゆうに、いつしょになつて、わらつたり、話したりすることができぬのです」と説明。自身の画家としての功名心を問われると、「とんでもない、それは名誉欲の強い人のことです」と否定する。「しかし、自然は、いつ見ても平和で、美しい。人間も、まちがつた考えや、欲望さえ持たなければ、互に親しみ合うことが出来て、美しいにちがいがありません」。欲望を絶った先に、美しい共存共栄の社会が訪れるというのが、画家の主張だ。この主張には、未明の理想が、よく仮託されていよう。

「きよくただしく」（「五年の学習」昭和三一年一月）は随筆。児童雑誌の新年号に書かれた一文だ。この随筆で、未明は「きみたちはいま、人生のかどでに立っている。その出発にあたって、きみたちはじぶんにほこりをもち、つねに正しい、美しいものに目をむけ、きたない、まちがったものから、じぶんをまもらなければいけない。（中略）わるいかんきょうにまけず、美と正義にかんげきする人間になろう」と、タイトル通り、「きよくただしく」生きるよう、児童を鼓舞している。小学生向けの文章だから、対峙すべき「きたない、まちがったもの」「わるいかんきょう」が何を指すのか、具体的には明示されていない。しかし、サキチ親方や役人の一行に象徴される大人の私欲も、当然、そこに含まれると考えていいだろう。

**おわりに**

以上見てきた通り、戦中から戦後にかけて、未明は国家主義者から反戦民主主義の伝道者へと変貌を遂げる。社会主義の放擲に次ぐ「再転向」だ。本稿では最後に、この間の未明の再転向を、大きく三つの観点から振り返りたい。

一つは、アジア・太平洋戦争の推進が、反戦の呼号へと反転した点である。未明は戦中、近衛文麿内閣、東条英機内閣がそれぞれ提起した「東亜新秩序」「大東亜共栄圏」の理念に同調し、アジア・太平洋戦争を積極的に礼賛していた。例えば、「我が日本は、実にそれ故に東亜後進諸民族のために、これまで搾取と暴戻を恣にした

る、米英の鉄鎖を断ち、永遠にその禍根を絶たんとして立上つたのである」（「解放戦と発足の決意」日本少国民文化協会編『少国民文化論』国民図書刊行会、昭和二〇年二月）と、連合国との戦いの正義性を確信している。ところが、敗戦後の未明は「戦争ばかりは、地獄にまさる、この世の地獄ですぞ」「みんな大人の犯した悪の報いです」（「悲しみを知らない嘶」「社会」昭和二一年九月）と、戦争の悲劇・愚昧さを、童話の作中人物へ嘆かせるに至った。しかも自身の戦争責任に関しては、一言半句たりとも反省の弁を語らない。無節操とさえ言える、朝令暮改振りだ。

二つは、政治体制の理想が、天皇を頂点とする家族国家から民主主義へシフトした点である。戦中の未明は、天皇を「国民の父」に、国民を「陛下の赤子」に見立て、国家を一つの家族に準える家族国家観を信奉していた。例えば、「日本の家族制度は、日本精神を中軸とする、世界無比のものである。皇道日本は皇室中心の一大家族でないか？　上下三千年、これがために和協一致が保たれたのである」（「日本的童話の提唱」「報知新聞」昭和一四年九月二〇～二三、二五・二六日）といった発言がそれである。しかるに、戦後の未明は、「真の民主主義への新しき芽を擁護しなければならない」（「現下の所感」「児童文学新聞」昭和二五年三月一日）と説き、「暇があれば、選挙候補者の演説を聞き歩く」（「心の芽」「少国民の友」昭和二一年二月）民主青年を、自作の主人公に据えている。天皇を核とする家族国家への愛慕は、雲散霧消してしまった。

三つは、資本主義批判の質が、制度に対する弾劾から、個人の私欲を戒める方向へ転じた点である。戦中の未明は、資本主義こそ、民衆を堕落させる諸悪の根源と見做し、徹底した痛罵を浴びせていた。例えば、「資本主義は、いろいろの分業を産み、人間を機械に隷属せしめ、人間を退化せしめたのだ」（「日本的童話の提唱」同前）と、人間の「退化」の原因を資本主義に帰責させている。翻って戦後の未明は、資本主義というシステムそのものへの批判を、さほど行わない。むしろ、人々が資本主義から悪影響を受け、欲望にまみれた存在とならないよう、個人の心がけを糺そうとする傾向が顕著である。成金に母の思い出のバラを売り渡さない「ヤスケじいさん」（「金で買えない仕合せ」「こども朝日」昭和二三年七月）や、「人間も、まちがつた考えや、欲望さえ持たなければ、互に親しみ合うことが出来て、美しいにちがいがありません」（「託児所のある村」「文学教育」昭和二六年一〇月）と欲望の放棄を説く青年画家は、未明の反私欲の祈念が具現化した存在だろう。制度の糾弾より、人心の啓発に、力点が置かれている。

**注**

1　山中恒の『戦時児童文学論』（大月書店、平成二二年一一月）は、昭和期の未明の国策協力を詳述した労作だが、本書は戦中の歩みのみに焦点を合わせているため、大正・戦後の足跡や、三者の前後比較は

論じられていない。なお、未明の変節については、鳥越信も「ともかくこんなにはげしくゆれ動いた作家は珍しいと思うが、もっとふしぎなのは、そうした未明への否定的・批判的な評価はほとんどなく、常に未明はその時々の日本児童文学の頂点に立つ作家として、高い評価を与えられてきた点である」（「小川未明」『鑑賞日本現代文学第３５巻　児童文学』角川書店、昭和五七年七月）と指摘している。

2　児童文学者協会の綱領・規約は、蔵原惟人・中野重治・宮本百合子らが設立発起人を務める新日本文学会の綱領草案「民主主義的文学の創造とその普及」、規約草案「本会ハ民主主義文学ノ創造ト普及トヲ目的トスル」（「新日本文学　創刊準備号」昭和二一年一月）と、ほとんど変わらない。加えて両団体は、民主主義文化の建設を目指す日本民主主義文化連盟へともに加盟しており、児童文学者協会は菅忠道・関英雄・奈街三郎の三名を評議員として送っている。

3　「子供たちへの責任」（「日本児童文学」昭和二一年九月）には、「戦争中はいかなる言葉をもつて子どもたちを教へたか。指導者らには何の情熱も信念もなく、ただ概念的に国家のために犠牲になれといひ、一億一心にならなければならぬといつて、形式的に朝晩に奉仕的な仕事を強制して来た。そして日本は一番正しいのであるし、敵は残忍であり醜悪であるといふことを言葉に文章に信ぜせしめようとして来た。それが終戦後の態度はどうであるか、今までの敵を賛美し、まちがつてゐたことを正しいといひ、まつたく反対のことを平然として語つてゐる」と、旧指導者層の戦争動員および戦後の変わり身の早さを指弾する叙述がある。しかし、日本少国民文化協会の役員として国策協力を担っていた、自身の振る舞いに関する反省的論及は見られない。

4　未明の次女・岡上鈴江によると、芸術院賞受賞に際しては、大正時代、未明を監視していた特別高等警察の刑事からも、祝いの手紙が送られてきそうだ。「父と母は感慨無量な面持ち」（『父小川未明』新評論、昭和四五年五月）であったと、岡上は回想している。

5　「童話を作って五十年」（「文芸春秋」昭和二六年二月）、「童話に生きる」（「中学時代」昭和二六年八月）、「人生案内」（「ニューエイジ」昭和二六年一〇月）、「「児童文学」の夜明けへ」（「読売新聞」昭和二八年八月二四日）、「常に希望をもつ」（「中学時代」昭和二九年二月）、「童話と私」（「改造」昭和二九年六月）、「私の一転機」（「週刊朝日」昭和三三年五月一四日）など。

6　「故小川未明氏に金一封」（「朝日新聞」昭和三六年五月一三日夕刊）

7　「心の芽」の初出誌である「少国民の友」（昭和二一年二月）をひもとくと、未明に限らず、全体として、民主主義賛美の色調が濃厚である。例えば、同誌の巻頭論文、平貞蔵「民主主義とはどういふことか」では、民主主義という政治思想の歴史的来歴を概観した上で、「連合国からさういはれなくとも民主主義の国、民主主義的な人間になるのがほんたうなのです。（中略）また国がほんたうに進歩するのにも民主主義が最もよいのです」と結論付けている。あるいは、米陸軍中尉＝エイリーン・R・ドノーヴアン「進駐軍よりおくる　日本の子どもたちへ」では、「アメリカでは、民主々義的精神の漲つてゐないとこ

ろはありません」「アメリカの子供たちは、大変程度の高い文明生活の中に、一人の責任ある社会人として養成されてゐます」と、民主主義を実践するアメリカの子どもの教育レベルの高さを褒めたたえている。

8　秋山清・小野十三郎らが編集責任者を務めた雑誌「コスモス」の創刊の辞でも、戦中・戦後の文学者の変節は、「敗戦の今日ではまた風の吹き廻しで猫も杓子も民主々義を唱へ昨日まで反動的国家主義の笛を吹いてゐた者までが恬然として自由の歌手に早変りするといふさはぎです」（「創刊について」「コスモス」昭和二一年四月）と批判されている。繰り返しになるが、未明もまた、その一人であった事実は疑い得ない。

9　例えば、大正期の評論「新社会の人間たらしむべく」（「女性」大正一二年三月）には、「私は、ある金持の細君が、病気で熱の高い子供を女中に委して、自分達は、自動車に乗つて芝居を見に行つたといふ事実を、ある人から聞かされた時に、其時、私は、この無恥、薄情の女をどんなに心で憎んだか知れない。「プロレタリアには、そんなものはない」と、さへ私は、叫んだのです」との記述があり、子どもの看病より「自己享楽」を優先させるブルジョア夫人への憎悪が表明されている。あるいは、昭和期の評論「発足点から出直せ」（『新日本童話』竹村書房、昭和一五年六月）には、「独り芸術家だけでなかつたが、金にさへなり、同時に虚名を博される場合には、往々人たることの矜持を忘れて、裸になつて踊ることも辞さなかつたでありませう。世間もまた新聞や雑誌の上で有名にさへなれば、その人を成功者として、特別に扱ひ、羨望したのであります。資本主義が、人間をして堕落させること、大概此の如くであります」との記述があり、金と名声に浮かれる成功者の様子を裸踊りに譬えている。

# Re-conversion of Mimei Ogawa : After Japan's Defeat in WWII

MASUI, Makoto

This paper is a sequel to "Conversion of Mimei Ogawa" which I wrote in the journal *Japanese Literature Culture* (*2015 ／ 2016*). In those articles, I tried to trace the conversion of Mimei from 1912 to 1945. Although Mimei initially believed in socialism, as soon as the Sino-Japanese War broke out, he discarded the ideology and turned to be an ardent nationalist. As a result, throughout the World War II, he aggressively showed his cooperation to the war.

However, Mimei's conversion did not end at this point. After Japan lost the World War II, he was re-converted. That is to say he quit to be a nationalist and began to advocate the importance of democracy and pacifism. This conversion as well as the former conversion was a surprising turnabout. But, until now, this disgraceful behavior of Mimei, "the father of Japanese children's literature", has not necessarily collected so much attention in the field of research.

Therefore, this paper aims to reveal the process of Mimei's postwar re-conversion by exploring his personal history and literary works. I would like to show how he changed his idea and why such a dramatically change occurred.